

2010年度 修士論文

高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校
サッカー指導者の人間形成に関する質的研究

High school Soccer Coach Who Experience Winning
The Championship And Training National Footballer
Of Human Educational Qualitative Research

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 コーチング研究領域

5009A017-1

大森 雄一郎

Yuichiro, Omori

研究指導教員： 堀野 博幸 准教授

目次

I. 序論	1
1. 先行研究	
2. 研究対象	
3. 本研究における「人間形成」の定義	
4. 質的研究の位置づけ	
5. 目的	
II. 方法	9
1. 対象者	
2. データ収集	
3. データ収集期間	
4. データ分析	
5. 信頼性検証	
III. 結果	13
1. 指導者 A	
2. 指導者 B	
3. 指導者 C	
4. 指導者 D	
5. 指導者 E	
6. 高校選手権優勝、日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者の人間形成に関するメンタルモデル	
IV. 考察	44
1. 他律から自律へ	
2. 他律と個性	
3. オンザピッチとオフザピッチ	
4. サッカーと人間形成の関係	
V. 結論	54
引用文献	
謝辞	

I．序論

1. 先行研究

高校生年代のサッカーの指導において、サッカーの技術、戦術的な指導だけでなく、人間性の指導が重要だと言われている。具体的な研究例として、優れた高校サッカー指導者による人間形成について述べている研究に北村ら（2005）の先行研究がある。北村ら（2005）は、スポーツの指導場面において、指導者が意図する指導行動が選手にどのように認知されるか、その結果、選手のパフォーマンスにどのように影響を与えるかといった状況を捉え、行動を決定するコーチング・メンタルモデルに焦点を当てて研究を行った。

この研究によると優れた高校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルは、個性を伸ばし、高校生選手としての幅を広げる技術向上に向けての「熟達化」、選手の思考や判断を引き出す自律への志向性育成としての「意識化」、選手がサッカーに専念できるように心理的、物的、関係的な環境作りとしての「支援」の3要素で構成されていると定義している。この研究で述べられている意識化、支援のカテゴリーにおいて、指導者が選手の人間性を指導するという教育的な志向性が示唆されている。しかし北村らの先行研究では、「支援」のカテゴリーで人間形成について触れているものの詳細な検討はされていない。この「支援」のカテゴリーで述べられている人間形成を、より詳細に検討することが本研究の課題設定につながる。

上記のことから本研究では、日本の優れた高校サッカー指導者が選手の指導において、人間形成の指導をどのように捉え、そして実際にどのように指導しているのかに着目して研究を進めた。

2. 研究対象

1) サッカーと人間形成

サッカーの競技特性に関して伊藤（2009）は、「サッカーはルールの中でチームの規律を基本に自由を表現できるスポーツである．またサッカーに限らず，社会というルールの中でも規律を守り，個人や組織がどう表現するかが人生である」と述べている．また鈴木（2009）も「サッカーは自分で考えて，行動を起こすスポーツです．個人の判断がないとサッカーはできません」と述べている．伊藤（2009），鈴木（2009）がここで述べているように，サッカーはルールを守る中でどのように自らの個性を発揮するかという点が重要になる競技という事ができる．

そして古沼（2006）は、「生きるということの基本姿勢を守ることがチームスポーツであるサッカーにも大いにつながっています」と述べている．生きるということの基本姿勢を守らなければ，チームスポーツであるサッカーを通して成功することができない．すなわちサッカーは生きることの基本姿勢を磨かなければ成功することができない，もしくはサッカーをすることで，生きることの基本姿勢を成長させなければ成功はあり得ないということが，古沼（2006）の述べていることから分かる．古沼（2006）のいう生きることの基本姿勢は人間性とも言い換えることができ，サッカーの競技特性が人間性と大きく結びついていることを示唆している．

さらに松田（2003）は「サッカーは人格のスポーツ．自己管理や，マナーができていないような選手は伸びない」と述べており，サッカーという競技が人間性と強く結び付いていると主張している．

上記のことから，サッカーの競技特性と人間形成指導の結びつきは強

いと考えられる．本研究では，人間形成指導を考えるためサッカーを研究対象とした．

2) 育成年代

本研究では，人間形成指導を考えるために高校生年代を対象にした．前述の伊藤（2009）は，「しっかりと自分で考えて答えを出し，出した答えに責任をもつことで，自尊心を養うことは逆にこの世代がやらなければならないことではないだろうか」と述べている．高校生年代は，進路を選択するという点で大きな決断を下す世代である．社会に出る生徒もいれば，大学に進学する生徒もいて，責任を取るということを指導者が伝えることができる大きな機会といえる．一旦彼らが社会に出て，自分の行動に対して責任を取ることができなければ，彼ら自身の社会での立場を失ってしまうことも考えられる．だからこそ伊藤（2009）が述べるように，責任をもち自尊心を養うことはこの世代で教えなければいけないことなのである．

また黒田（2008）は，「高校世代にとって必要なのは，人間教育である．これからの人生を生きていくための基礎を固める大切な時期なのだ．人としての基本を身につけさせないで，どうして選手が育つというのか」と述べている．ここで述べているように，高校生年代を教えるということは，彼ら自身の将来に大きな影響を及ぼすことができる年代であり，人間形成指導の重要性は高いといえる．

上記のことから，本研究では高校生年代を研究対象とした．

3. 本研究における「人間形成」の定義

本研究では，「人間形成」という概念を用いる．この概念を定義す

る際には友添（2009）、山邊（2000）を用いた．一概に人間形成といっても様々な考えが存在するが、友添（2009）は人間形成の定義として以下のような定義を行っている．

友添（2009）は体育を研究対象とする中で

「社会の永続発展を可能にする人間像を実現するために、個人のうちに社会的規範を内面化し、社会的行動力を生み出す社会性および倫理的規範の内面化と道徳的行動力を生み出す道徳性を形成する営みであると規定する」

と「人間形成」を定義する．友添（2009）は社会性を「人間社会を成立する為に、ルールを守り社会に適応することができる人間性」、道徳性を「自らの判断の基準を持って自発的、内発的に行動できる規範」と述べている．

友添（2009）が述べる社会性と道徳性の2つの要素を形成させる要因として、山邊（2000）は有益な視点を提供する．山邊（2000）は人間教育における人間形成を「社会的援助と人格化援助の2つの形式から成立する」と考察している．そして、この2つの形式に求められる「道徳を他律的道德（超個人的、社会的道徳）と自律的道德（個人的倫理、内的道徳）とし、人は他律的道德と自律的道德を用いて人間形成を行う」と述べている．

友添（2009）の用いた「人間形成」の概念は、体育という教育を研究対象とする中で用いられたものである．本研究は、優れた高校サッカー指導者を研究対象とするため、友添が用いた定義を直接当てはめることはできない．しかし優れた高校サッカー指導者の考える「人間形成」と友添（2009）による定義には共通したものがある．

横森（2008）は

「今の世の中，ルールの分からない者も多いんだけど，スポーツは一番そういうことを教えられる．挨拶や礼儀，社会規範，ルール，モラルをはじめ，人として大切な部分は，しっかり押さえておくことが必要でしょう」

と述べている．横森（2008）の述べる人として大切な部分は，しっかり押さえておくという概念は他律的道德であり，社会的行動力を生み出す社会性および倫理的規範の内面化である．

さらに布（2008）は

「子供の時から自分でプランが持てるようにすることが大事だと思う．その考えが間違っているでもいい．子どもは間違えるものなんだから．何でもそれダメだよって大人が否定してしまうのではなくて，間違っているでも聞いてやる．」

と述べている．布（2008）の述べる，間違っているでも聞いてやるという概念は自律的道德であり，道德的行動力を生み出す道德性を形成する営みである．

このように友添（2009）による体育における「人間形成」と優れた高校サッカー指導者である横森（2008），布（2008）が述べる人間性指導には共通する点がみられる．どちらの指導も他者から促す他律と自らを律する自律の要素を含んでいる．

体育における人間性指導も，サッカーにおける人間性指導も指導の際，共通の2要素を持つことから，本研究における「人間形成」を友添（2009）による体育における「人間形成」の定義を参考にして定義することは可能であると考えられる．

このように本研究では，「人間形成」について「他律による働きかけでの社会性と自らを律する自律での道德性を獲得させる行動」と定

義する．

4. 質的研究の位置づけ

本研究で行う分析と構築に関して，北村ら（2005）は，「どのような知識・信念・哲学・価値観に基づいて，研究対象者が指導行動を生起しているのかについて深く掘り下げた質的な情報が重要となる」と述べている．本研究においても，人間形成に焦点を当てて深層的に検討していくことを目的とするので質的な情報を必要とする．さらに質的研究の基本的特徴として Flick(2002)は，「調査の目的はこの場合，既成の理論の検証ではなく，現象の新たな側面を発見したり，実証的データに基づいて新たな理論を生み出したりすることである」と述べている．本研究では既成の理論を検証するのではなく，インタビューを通して人間形成について深層的に考察し，メンタルモデルを用いて優れた高校サッカー指導者における人間形成についての理論を生み出すことを目的としている．以上 2 点のことから本研究には質的研究が相応しいと考える．

インタビューには構造化インタビュー，半構造化インタビュー，非構造化インタビューの 3 種類が存在する．構造化インタビューは「すべての質問をあらかじめきちんと整理しておいて，決められた選択肢の中から答えを選ぶ（呉，2005）」と定義される．非構造化インタビューは「聞き手と語り手が相互に感受する語り合いの場のなかでその進行に則して具体的な質問がなされていくことになる（呉，2005）」と定義される．そして半構造化インタビューは「調べたい内容に関するオープン・エンド（選択肢による回答ではなく，自由に答えられるようにした質問）の質問項目をあらかじめ準備し，質問項目に沿って

聞き手が積極的に質問していく（呉，2005）」と定義される。

Flick（2002）は半構造化インタビューについて

「半構造化インタビューという方法の長所は，インタビュー・ガイドを一貫して用いることで，データの比較可能性が高まり，そこに含まれる質問項目によってデータの構造化の度合いが増すことにある．特定の事柄に関する具体的な証言がデータ収集の目的の場合には，この半構造化インタビューがより効率の良い方法だといえる」と述べている．ここで述べるデータの構造化とは，インタビュー・ガイドを用いることで実験者の意をデータへ反映し高めることといえる．本研究が人間形成に関する具体的な証言を求めていること，対象者から得たデータを比較し，検討することから鑑みて半構造化インタビューが望ましいと考える．

質的データ分析の伝統的方法としてエスノグラフィ，現象学的方法，グラウンテッドセオリー法，KJ 法，伝記法などが存在する．本研究ではグラウンテッドセオリー法を基に考えられた Côté et al.（1993）による質的データ分析法を用いる．基になるグラウンテッドセオリー法は「外側から出来合いの理論や概念的枠組みをトップダウンで押しつけるのではなく，データとの対話のなかからボトムアップ的に作り上げられた現象理解の為の枠組み（能智，2005）」と定義される．その定義に則って作成された Côté et al.（1993）による質的データ分析法は標題作成，サブカテゴリー作成，カテゴリー概念化，信頼性検証の 4 つのステップにより分析を行うものである．本研究で Côté et al.（1993）による質的データ分析法を用いた理由として，この方法がグラウンテッドセオリー法の特徴を持つことにより，対象者にとっての事実や経験をボトムアップしてモデルを作り，理解することが可能で

あることが挙げられる．上記のことから本研究では Côté et al.(1993) による質的データ分析法が相応しいと考える．

本研究で作成するメンタルモデルは「心の中でもつ表象（イメージ）であり，それを操作することによって問題を解決するのに使われるもの（Johnson-Laird, 1983）」と定義される．北村ら（2005）によると

「メンタルモデルによって，スポーツ指導の指導行動を捉えた時，指導者の直面した状況をどのように理解し，どのような意図と予測を持って指導行動を選択したのかを説明することが可能となり，その結果，指導者の指導観，指導意図，および指導行動の全体が明らかとなる」

とされている．よってメンタルモデルを作成することは，優れた高校サッカー指導者が人間形成指導を行う時に，どのように指導行動を選択したかを考えることに有益であると考ええる．

5. 目的

上記のことから「高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者による人間形成に焦点を当てたメンタルモデルを作成すること」が本研究の目的である．

Ⅱ．方法

1. 対象者

インタビュー対象者の選定条件は、北村ら（2005）の先行研究を参考に作成した。北村ら（2005）は、対象者の選定条件として4点設定している。

- 1) サッカー指導者としての指導歴が10年以上。
- 2) 監督として指導に当たったチームを継続的に勝利へ導いた実績を持つ（過去10年間に全国レベルの大会で5回以上ベスト8に入る）。
- 3) 各年代の日本代表選手あるいはJリーグ選手等の優れた選手を継続的に育成している。
- 4) 日本サッカー協会等に所属する第3者的な複数の専門家から優れた指導者として高い客観的な評価を得ている。

北村ら（2005）は、対象者の選定に際して、勝利だけでなく育成の成功も考えることで、より優れた高校サッカー指導者を選定している。

本研究では、対象者の選定条件として北村ら（2005）が述べているように勝利と育成の観点から、

- 1) 監督として指導にあたったチームを勝利に導いた実績がある（過去10年間で、高校選手権でチームを優勝に導いた経験がある）。
- 2) 日本代表選手（日本代表Aマッチ出場経験を持つ選手）を育成した経験をもつ。

という2つの基準を設定した。この条件に当てはまる対象者は6名であり、どの対象者も高校サッカー指導時に当該高校の教員であった。本研究では6名の内、5名からの協力が得られた。インタビュー対象

者のプロフィールは表 1 に示す.

表 1 インタビュー対象者のプロフィール

対象者	年齢
指導者 A	60 代
指導者 B	60 代
指導者 C	60 代
指導者 D	70 代
指導者 E	40 代

2. データ収集

データ収集において 1 対 1 の半構造的, 深層的 (より深く指導者の語りを引き出す), 自由回答的 (対象者は質問に対して自由に述べる事が可能) インタビュー調査を用いた.

質問項目は基幹的質問, 追跡的質問, 探索的質問の 3 種類の組み合わせにより構成した. 本研究で伺った基幹的質問, 追跡的質問, 探索的質問は以下の通りである.

基幹的質問:

- 1) オンザピッチ, オフザピッチの指導で, 大事にしていることは何か.
- 2) 人間形成を指導することはこういった位置づけにあるのか.
- 3) 人間性を指導する際にこういった事に重きを置いているのか.

追跡的質問:

例) 先生御自身がそう考えるようになったきっかけはございますか?

例) 実際にオンザピッチで選手にどのように指導されていますか？

探索的質問：

例) 何故その位置づけになったのでしょうか？

例) 何故オンザピッチとオフザピッチはつながっているとお考えになりますか？

3. データ収集期間

2010年8月～9月の約2ヵ月間でデータ収集を行った。約70分のインタビューを5名の対象者に対して実施した。

4. データ分析

質的データ分析法 (Côté et al.,1993)を用いた。この分析方法には以下4つのステップが存在する。

1) インタビューのテキスト化

インタビューはICレコーダーにて録音し、得られたデータをテキスト化した。尚、この作業はデータ入手後1週間以内に行った。

2) 標題作成

テキスト化したインタビューデータを、人間形成という概念あるいは見解を含む意味単位 (meaning unit)に分け、それぞれに標題を付けた。

3) サブカテゴリー作成

全ての標題を比較し、類似した意味を持つ標題で、共通の上位概念

に括られるサブカテゴリーへ再編成し，それぞれのサブカテゴリーに
標題を付けた．

4) カテゴリー概念化

サブカテゴリーを，より広く抽象度の高いレベルのカテゴリーへと
統合した．統合したカテゴリーに対して，人間形成に関するカテゴリー
間の関係性が，新たに見出せなくなるまで検討を行った．

5. 信頼性検証

信頼性の検証は Culver et al.(2003)を参考に 2 つの方法を用いた．

1) 研究方法の明示

インタビューの方法や手順，データ分析方法を可能な限り明らかに
し，どのような過程で研究が行われたのかを明示する．

2) 研究者による点検

Côté et al.(1993)による質的データ分析法に基づき，質的研究法の
経験を 2 年以上有する 2 名の研究者により点検を行った．

Ⅲ．結果

1. 指導者 A

13 ページにわたるインタビューデータから 110 の意味単位 (meaning unit) が得られた。これらの意味単位 (meaning unit) は「自分で責任を持って行動する」「コミュニケーションの重要性」「見て、感じて、行動する」「好きなことを一生懸命やる」「嫌なことも前向きに取り組む」「良い行動を習慣化する」「我慢強い力、頑張る力は大切」「サッカーをやる上で人間性が大切」「叱るべき時に叱る」「高校生らしく行動できる」「決まり、規則の理解がベースにある」「必要な時期に正しいものを身に付ける」「人と会うことで自分が磨かれる」「子供によって指導を変える」「今やったことが後に成果になる」の 15 のサブカテゴリーに分類された。これらは最終的に「自律」「他律」「個性」の 3 つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーの選手に対する影響度の強さは図 1 の中に、カテゴリーの大ききさで示した。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーの分析過程を詳術していく。

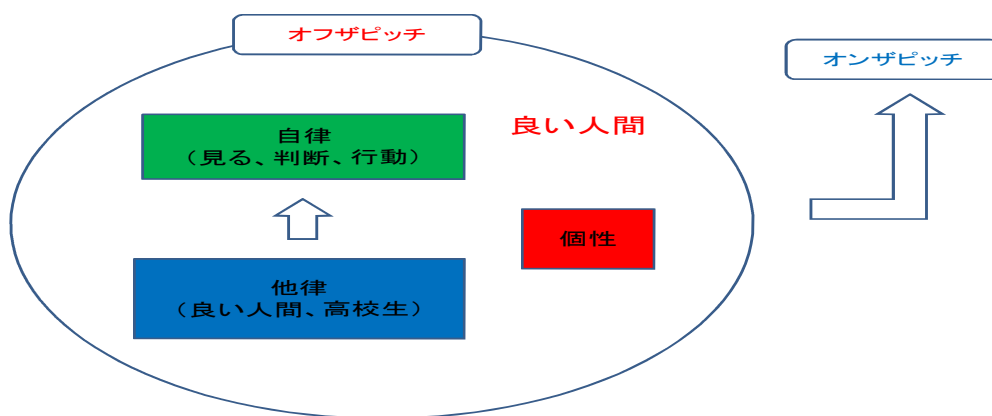


図 1 指導者 A の人間形成に関するメンタルモデル

1) 自律

表 2 - a 指導者 A 階層のカテゴリー一覧

自律	自分で責任を持って行動する	自分で正しく判断する 自分で判断するようにならないといけない 自分でやっていくことが大切 取り入れて自分で考える 主体性をもって行動することが大事 自分の行動に責任をもつことで大人になる 責任のある言動をする 自己表現をすることは社会生活でも同じ 決断を下せたかどうか大切 優柔不断は駄目 言わずにやろうとするのが良い 人間は集団になると顔色を伺う 自分の意見を言える方が面白い 人はいざという時に決断しなければならない 集団の中でも自己責任をもつ
	コミュニケーションの重要性	コミュニケーションの必要性を説く やんちゃいけいけないことを伝えあって組織ができる ディフェンスの声は重要 人の話を素直に聞いて自分のものにしようとする 信頼されてピッチでプレーする コミュニケーションで幅の広いプレーヤーになる コミュニケーションで気持ちが変わる 声が自然に出てくるのが人の良い関係
	見て、感じて、行動する	足元も見れて遠くも見れることが大事 自分がやっていることを幅広く見て感じる 見れて感じて行動するのが大切 瞬時に見て感じて行動する 心づかい、気配りがサッカーでも必要 感じる人間にならないといけない 状況を感じてさっと行動する 感じると自分の非を認めることができる
	好きなことを一生懸命やる	好きなことを一生懸命にやる 好きなことを一生懸命やる 好きなことの為に他のこともやる 好きなことは目標を立てやすい 好きなことに対してクリエイティブになれる 選手に何故ここにいるか問いかける 取り組む姿勢で違いが生まれる 前向きにやることで人間性が広がる 好きなことを頑張ることで人を生かす
	嫌なことも前向きに取り組む	サッカーをやる内に学力を身につける必要性が分る 嫌なことでも一生懸命やる 好きじゃないことを一生懸命にやれるか 嫌なことを嫌々やってもしょうがない
	良い行動を習慣化する	良い意味での習慣が良質の行動の要素 行動の習慣化を身に付ける スポーツで伝える習慣化
	我慢強い力、頑張る力は大切	我慢強い力、頑張る力などの大切さを伝える 我慢強い力、頑張る力はコミュニケーションで得るも

このカテゴリーは「自分で責任を持って行動する」「コミュニケーションの重要性」「見て、感じて、行動する」「好きなことを一生懸命やる」「嫌なことも前向きに取り組む」「良い行動を習慣化する」「我

慢強い力，頑張る力は大切」の 8 つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 A は，このカテゴリーに関して「自分のことをしっかり考えるということだね．自分のことをしっかり考えるようになれて，自分の行動に責任を持てるようになると他人のことも構えるようになってくる．要するにそれが大人になる．」と述べている．ここでは自分が判断して行動する責任を，意識して持つことができるようになるのが大人になる原点だと指摘する．そして大人になるということは，オンザピッチでもオフザピッチでも重要だとして

「ピッチの中で自己表現をする，パフォーマンスをする時に自分だけの為にパフォーマンスをするのか，チームじゃなく自分の判断でやんなきゃいけないとかね．そういうことはサッカーの競技の性質から人間の社会生活と変わらないと思うね．」と述べている．

「自律」のカテゴリーでは，自分の取った行動に責任を持つことで，他人のことを意識することができるようになる」と示唆されている．

2) 他 律

表 2 - b 指導者 A 階層的カテゴリー一覧

他律	サッカーをやる上で人間性が大切	高校生である前に人間である 自分であることに感謝する 集団生活, 合宿で学ぶものがある 人間教育はサッカーをやるのに必要なこと 社会生活とサッカーの組織は似ている 人間性が面白いチームは強い 喜びで脳が活性化する
	叱るべき時に叱る	叱るときと褒める時を考える やってないときに叱る 子供を動かせない先生が増えてきた やらせることの必要性 動かすことが出来ないと自分だけ逃げる やるのが当たり前前の状況を理解させる 率先してやってみて考える カッとしたら一言で済ます 子供の半分に好かれて半分に嫌われるのが本物 サッカーは相対的なもの
	高校生らしく行動できる	高校生であることが前提 高校生は大人になりかけの段階 高校生として高校生らしさを理解している 高校サッカーは高校生しかできない ～らしさが自然と表現できるようになる
	決まり, 規則の理解がベースにある	ピッチの中でも外でも決まり, 規則がある 日本人はサッカーの規律が身につけていない 約束事の理解がベースにある ベースを理解して判断して行動する しっかりするのが大切
	必要な時期に正しいものを身に付ける	教わる時に正しい技術を身につける 必要な時に規律が身につけていない 必要な時期に必要なものを身につける その時点で身に付けることでしっかりできる 正しい時期に正しい理解を身につける

このカテゴリーは「サッカーをやる上で人間性が大切」「叱るべき時に叱る」「高校生らしく行動できる」「決まり, 規則の理解がベースにある」「必要な時期に正しいものを身に付ける」の 5 つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 A は, このカテゴリーに関して「高校生として駄目だって言われるよりは良い高校生になって欲しいし, 高校生である前に人間だ

ろうと．サッカーとかスポーツっていうのは人間がやるもの．」と述べている．サッカーというスポーツは人間がやるものだからこそ，良い人間であることが求められるとしている．ここでは良い人間になる為には学校や社会のルールをきちっと理解させ，高校生らしく行動させなければならないと指摘している．そして，理解させる為に指導者が取るべき行動についても触れ「私はやっぱり叱るときは叱るし．あんまり褒めはしないんだけど，認めるっていうのかな．今日のお前は良かったとか．こういうことはやっぱり考えなければいけない事．」と述べている．

「他律」のカテゴリーでは良い高校生，人間として行動させる為に指導者は選手に工夫して働きかけ，正しい行動を最初に理解させる必要があると示唆されている．

3) 個性

表 2 - c 指導者 A 階層的カテゴリー一覧

個性	人と会うことで自分が磨かれる	人と会う事で方向性を探す 自分の行動がオリジナルを作る 人と会う事が財産になる
	子供によって指導を変える	子供によって成長の違いがある 子供によって対応を考える 人間性を指導者が見抜く 人間性を見抜いて合わせて接する 学年や個人個人で人間性が違う 自分に合った方法を探すことが1番 自分が理解して子供に伝える 生徒のレベルに合った指導をする 子供を好きでなければいけない
	今やったことが後に成果になる	自信を得るきっかけが3年間である 今接していることが今の成果でなくても良い

このカテゴリーは「人と会うことで自分が磨かれる」「子供によって指導を変える」「今やったことが後に成果になる」の3つのサブカ

テゴリーにより構成される。

指導者 A は、このカテゴリーに関して「我々は表面的な部分だけでなく人間性を見抜かなければならない。」と述べている。指導する際に選手の人間性を考慮することが、選手をより成長させることにつながると指摘する。そして選手に合わせて指導する結果についても「今接していることが今の成果じゃなくて良いんだしね。ただサッカーはこの3年間の中でできるだけ良い結果を出さなくてはいけない。」と述べている。指導者 A は、人間性を見抜いて指導することの結果が、選手が卒業した後に表れても選手の為になれば全く問題ないが、サッカーは3年間で結果を出さなければならないと考えている。

「個性」のカテゴリーでは、指導者は選手の人間性を見抜いて指導しなければならないと示唆されている。

2. 指導者 B

25 ページにわたるインタビューデータから 113 の意味単位 (meaning unit) が得られた。これらの意味単位 (meaning unit) は「感じ方を教えて人を動かす」「高校サッカーを通じて教える」「技術、体力より心が重要」「メンタリティによって将来が変わる」「障害を乗り越えて夢にたどりつく」「限界を超えさせるのが指導者の役割」「低年齢の内に教育する」「躰を1番に教える」「物事の分別を教える」「最初は躰で教育する」「家庭教育の変化のマイナスが子供にいつている」「集団を利用して鍛える」「指導者の態度で子供は学ぶ」「指導には情熱が必要」「個別に応じた指導をする」「教育はアナログであるべき」「日本の教育を立て直す」の17のサブカテゴリーに分類された。これらは最終的に「自律」「他律」「個性」の3つのカテゴリーに分類

された．各カテゴリーの選手に対する影響度の強さは図 2 の中に，カテゴリーの大きさで示した．以下，指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーの分析過程を詳術していく．

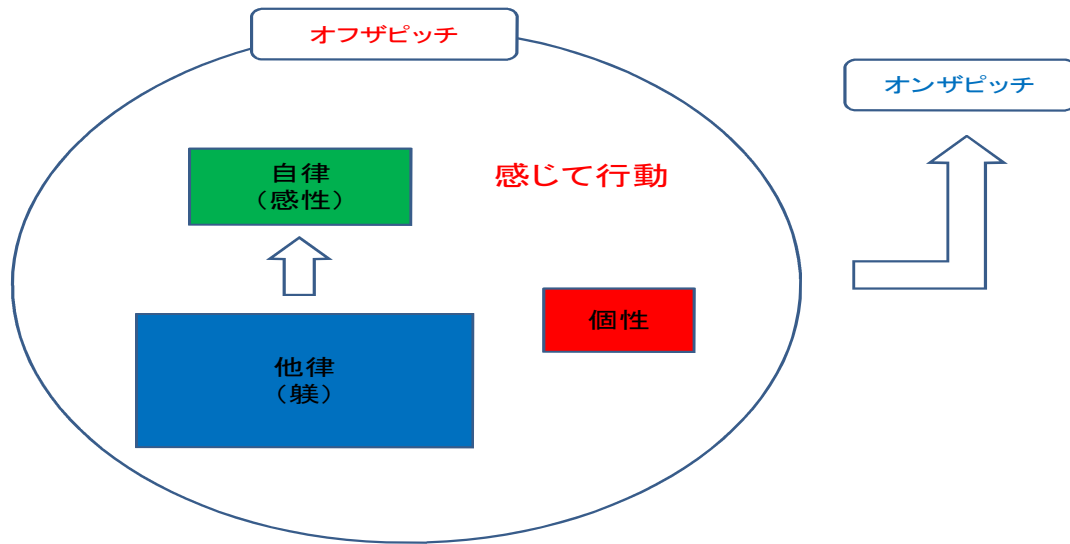


図 2 指導者 B の人間形成に関するメンタルモデル

1) 自律

表 3 - a 指導者 B 階層のカテゴリー一覧

自律	感じ方を教えて人を動かす	感じ方だけで動く 理論的なのはそんなに好きじゃない 教育では感動が人を動かす 感性の方が人がよく動くから大事にしている 毎日の中に子供と接していて感じることは転がっている 感じることを見逃さないで生徒に伝える 感じることを教えて人間について学ぶ 感じ方で私も子供も動く なるほどという感動が少ないから動かない 教育では感動させて人を動かす 最高の感動とは子供達が何を求めているか 日常にはプラスの感動、マイナスの感動がある 子供達の感性を磨くことを大事にする 簡単に人は変わらない 子供達の感じ方を大事にしたい 出会うものに対しての感じ方を教える 世の中出会うもの全てに対して感じる 感じない限り直らない 感じ方を教えていく
	高校サッカーを通じて教える	高校サッカーは教育の一つの手段 高校サッカーは人間教育しやすい教材 高校サッカーは色々な事を教えるやすい 高校サッカーには色々な事が詰まっている 1つの集団、教育手段として捉える サッカーのことを常に考えている サッカーを通じて正しい人間を育てる
	技術、体力より心が重要	心技体では心が一番上にある 心が一番上にあって次に技、そして体がある グラウンドの上では良く頑張る 心のところに問題がある 心が無ければ何をやっても駄目と伝える 心は子供にとってつかみにくい 人の為にやってみようとする人間になる サッカーは誰でも教えられる 個々をみて行き当たるのは必ず心 最終的にはメンタル、ハートが重要 選手が伸びるか伸びないかは心次第
	メンタリティによって将来が変わる	メンタリティによって将来が変化する 教育効果は今日教えて出る訳じゃない 教育効果は何年もして効果が出る メンタルには色々な要素がある メンタリティには色々な要素がある
	障害を乗り越えて夢にたどりつく	夢を叶える手段を教える 色々な障害を乗り越えていけるかが夢にたどりつくこと 志が強ければハードルは越えられる
	限界を超えさせるのが指導者の役割	限界を超えさせるのが指導者の役割 限界を超えさせるのが指導者の役割 子供の限界をどかすのが指導者の役割 どかすか超えさすかが指導者の役割 アドバイス、トレーニングで壁を越えさせる

このカテゴリーは「感じ方を教えて人を動かす」「高校サッカーを通じて教える」「技術，体力より心が重要」「メンタリティによって将来が変わる」「障害を乗り越えて夢にたどりつく」「限界を超えさせるのが指導者の役割」の6つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 B は、このカテゴリーに関して「その感じ方を教えれば、その子は私がいなくてもお茶を飲んでも飯を食っても何をしていても感じると思うんですよね。その感じ方を教えていかないと駄目だと思う。」と述べている。ここで、感性を指導者 B が重要視していることが分かる。選手の感性を磨くことで、選手が自ら物事に対して様々なことを感じるようになる。そして感じられるようになることで、行動が自然と自発的に変わっていくと指導者 B は考えている。何故、感性を重視するかについて「心，技，体っていうのは心が1番上，その次に技があって，その次に体，フィジカルがあるという。」と述べている。ここから、指導者 B は選手の行動のベースは心であり，心は感性によって豊かになると考えているのが分かる。

「自律」のカテゴリーでは、選手の行動の源である感性が豊かになることで、選手の行動が自発的に変化していくと示唆されている。

2) 他律

表 3 - b 指導者 B 階層的カテゴリー一覧

他律	低年齢の内に教育する	高校生は生活習慣になるには時間がかかる 何歳まで何を教えるかというのが無い 基本的なことを3年生までにきちんとしておく 年齢に応じた指導法が整理されていない 当たり前のことを習慣づけないといけない 小さいときに身についた技は瞬間的に出る 躰は小学校3年までが勝負 3歳までにコミュニケーションをとる 1日中子供という環境が大切 耳が母の声に慣れていないと顔で表現する子供になる 低年齢のうちに感じ方を教育する
	躰を1番に教える	躰は1番叩き込まなきゃいけない 強制しないと躰は絶対できない 自信を持てるだけ躰 判断する材料を与える 学校には躰という伝統があった 躰が無いとある程度までしかいけない 鍛えて追い込む苦しさが大事成ってくる
	物事の分別を教える	問題が起きるのは悪い事を知らないから 出来ないことを知らないうちに15歳になる子が多い 判断が分からない子に自由はない 知らないのと知ってやるのは違う 先に自由を教える危険性がある 自由をでたらめに教えてはいけない
	最初は躰で教育する	教える時には強制する部分が必要 新しいものを教える時には強制が必要 メンタリティの養成は教育 日本は強制ではなく躰や教育でメンタリティを作る スタートは教育、自由はその次
	家庭教育の変化のマイナスが子供にいつている	家庭環境の変化が大きい 家庭教育が変化の途上にある 家庭での父母のあり方は変わってきた 家庭の在り方で父母の関わりは変わった 今は躰が学校の中に入ってきた 三分の一の今の若者はびっくりする サッカー部の様相が変わってる 競技の頑張り方に自分の為というように変わってきた 家庭教育のしわ寄せが子供にいつている
	集団を利用して鍛える	環境の中で子供達のベクトルが同じ方向に向く 日本一になるための環境を噛み砕いて伝える 個人の意識はそんなに強くない 集団を利用して鍛える
	指導者の態度で子供は学ぶ	指導者が率先することで感じる 子供が指導者を見て感じる 最悪の負けは練習不足か質に問題がある
	指導には情熱が必要	情熱、思いがあれば仕事が出る 思い込みが弱ければ何もできない 指導者には情熱、思い込みが大切 負けん気がないと情熱がでてこない 情熱の後に夢が出てくる

このカテゴリーは「低年齢の内に教育する」「躰を 1 番に教える」「物事の分別を教える」「最初は躰で教育する」「家庭教育の変化のマイナスが子供にいつている」「集団を利用して鍛える」「指導者の態度で子供は学ぶ」「指導には情熱が必要」の 8 つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 B は、このカテゴリーに関して「教育をしようかっていった時のスタートには強制があり得るという。自由はその次だよと。」と述べている。選手に対して教育する時に強制して躰なければ、選手は何も身に付けることができないと指摘している。躰を第 1 に持つてくる理由として

「色々なことをしつけて、人のものをとっちゃいけないとか。ね、それを自由に自由につてやったらね、人のものをとったりしてそれが当たり前だと思っちゃうわけですよ。知らないのと知っててやるのは違う。知っててやるのは悪いって言うよ。」

と述べている。指導者 B は、躰することで物事の分別を理解させて、行動の判断の基準を作る、そして判断の基準があることにより選手は正しい行動ができるようになると考えている。

「他律」のカテゴリーでは教育のスタートとして躰することで、選手が判断の基準を身につけ、正しい行動を取ることができるようになる、と示唆されている。

3) 個性

表 3 - c 指導者 B 階層のカテゴリー一覧

個性	個別に応じた指導をする	多くの選手をどうまとめるかが問題 それぞれにあった指導をする
	教育はアナログであるべき	アナログであるべき教育がデジタルになっている 人と語り合って得る感動は質が違う マニュアルはデジタルである 指導要録を教えるのはデジタル 教育はアナログであるべき 大局をみて教育すべき 理想の教育, 良い指導を考える
	日本の教育を立て直す	混乱しているものを立て直せないわけがない バブル崩壊後日本の教育は駄目になっている 表面だけ真似しても意味がない 自分のことを自分でするのは日本の教育の原点

このカテゴリーは「個別に応じた指導をする」「教育はアナログであるべき」「日本の教育を立て直す」の 3 つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 B は、このカテゴリーに関して「毎日毎日、大局を見てないからね、先生方は、どの教科でもこの 3 年間で何と何と何を教えればいいのかっていうのが整理できてない。」と述べている。ここでは日本の高校教育を例に出し、日本の教師は大きな視点で教育を捉えずに目の前の事ばかりに振り回されていると指摘している。そして「そういう風に具体知がなきゃ駄目、具体知っていうかそれぞれに合った指導をやらなきゃ駄目。」と述べ、教師はやることを整理した上で目の前に生徒 1 人 1 人にあった指導をしていくべきだと指摘している。

「個性」のカテゴリーでは、指導者がやるべきことを整理した上で選手 1 人 1 人にあった指導をしていく方法が理想だと示唆している。

3. 指導者 C

14 ページにわたるインタビューデータから 67 の意味単位

(meaning unit) が得られた。これらの意味単位 (meaning unit) は「勉強は大切」「自主性を伸ばす」「教育には 2 面性がある」「人間教育が全てであり基本である」「サッカーだけで生きれる訳ではない」「社会で適応できる人間性を育てる」「原点は家庭にある」「教えるべきことは教える」「日本の教育者は怒れない」「個性はすごさである」「選手を見た上で長所を生かす」の 11 のサブカテゴリーに分類された。これらは最終的に「自律」「他律」「個性」の 3 つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーの選手に対する影響度の強さは図 3 の中に、カテゴリーの大きさで示した。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーの分析過程を詳術していく。

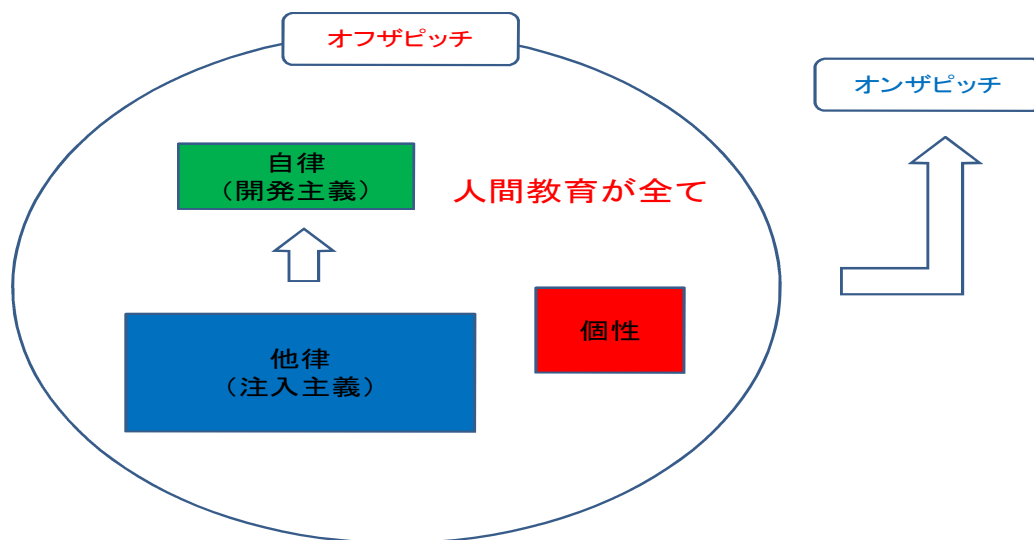


図 3 指導者 C の人間形成に関するメンタルモデル

1) 自律

表 4 - a 指導者 C 階層のカテゴリー一覧

自律	勉強は大切	日本は非常に高い学歴社会 勉強しなきゃ駄目 勉強をして人間を磨く
	自主性を伸ばす	自主性は放任と紙一重 何も言わないことは楽 自主性は自由な発想の中で育つ 体育館の練習は自由奔放にやる所 自由からアイデアが生まれる 自由な発想から生ずる個性
	教育には2面性がある	注入主義と開発主義が大切 育つことと教え込むことの2面性が教育にはある ディシプリンとクリエイティブが大切 注入主義と開発主義が大切 教育は注入主義と開発主義を並行してやる 怒ることとほめることの2面性を教える 引き出すことと教えることはセット

このカテゴリーは「勉強は大切」「自主性を伸ばす」「教育には 2 面性がある」の 3 つのサブカテゴリーにより構成されている。

指導者 C は、このカテゴリーに関して「個性・創造力にもつながるね。あるいはアイデアかな。こんなものは自ら育つというか、自由な発想の中で育つ。これが自主性だね。」と述べている。指導者が選手にあえて働きかけないことで、選手が自由な発想を持ってプレーするようになると指摘する。

「自律」のカテゴリーでは、指導者が思い描く枠の中に選手をはめ込まず、選手に自由にプレーさせることで想像力、自主性が伸びていくということが示唆される。

2) 他 律

表 4 - b 指 導 者 C 階 層 的 カ テ ゴ リ ー 一 覧

他 律	人間教育が全てであり基本である	人間教育が全てであり基本である 人間教育をしないと何事も始まらない 人間性を教育できるチームは強い 人間性を重要視していると強い 人間性教育が1番大事 過去の駄目になった例を伝える 人間性でJリーグにいくやつもいる 人間教育は根気が必要で嫌がられる仕事 人間教育は根気が必要で嫌がられる仕事 高校サッカーはメンタル面が多い 最後に大事なものは人間性
	サッカーだけで生きれる訳ではない	サッカーで生活できるのは35くらいまで 50年間はサッカー以外で生きる サッカーに携われるのは一握り Jリーグよりも大学で学ぶ
	社会で適応できる人間性を育てる	社会で適応できる人間性を育てる 社会が求めるのは社会生活に適応できる人間 社会生活に適応できる人間を育てるのが求められる サッカーだけでなく普段の生活もピシッとする 普段の生活が大切だと伝える 普段から生活上の基本を教える 社会性を養うのも教育 指導者は毎日グラウンドにいなければならない
	原点は家庭にある	原点は家庭教育 原点は家庭にある 原点は家庭教育 家庭教育が大切 家庭教育の上に社会教育、学校教育が積み重なる 原点は家庭 家庭を見れば大体分かる 家庭を見れば子供が分かる 家庭が1番大切
	教えるべきことは教える	周りから教えることも必要 全部教えたら同じ選手になる 厳しくやる所は厳しくやる 約束事は守らせる 注入主義では色々言う きちんとすることで波及効果がある

このカテゴリーは「人間教育が全てであり基本である」「サッカーだけで生きれる訳ではない」「社会で適応できる人間性を育てる」「原点は家庭にある」「教えるべきことは教える」の 5 つのサブカテゴリーにより構成されている。

指導者 C は、このカテゴリーに関して「人間教育をピシッとこうや

らんと何事も始まらない。」と述べている。指導者が選手に指導する際に大切にしなければいけないこととして、人間教育を大切にすべきだと捉えている。何故、人間性を指導しなければいけないのかという点に関しては「社会生活に適応できる人間を育てていくということが日本では求められていると思うんだよ。」と述べ、日本では社会性を発達させることが求められていると指摘している。そして社会性を発達させる方法論として「お前がやられたらどう思うか。もう来るなっという。そのへんはもう厳しくやる。」と述べ、社会性を発達させるには、まず選手に徹底的に教え込まなければいけないとしている。

「他律」のカテゴリーでは、最初に徹底的にルールを教え込むことで、選手は社会性を発達させることができるといった考えが示唆される。

3) 個性

表 4 - c 指導者 C 階層的カテゴリー一覧

個性	日本の教育者は怒れない	日本の教育に怒ることが欠けている 日本はもう一度原点に帰るべき 教育的な指導を忘れている指導者が多い
	個性はすごさである	すごいというのはずば抜けた個性 個性はすごさ 指導者のカリスマ性
	選手を見た上で長所を生かす	生徒、能力、家庭状況を考えて判断する 選手の特性を考慮して考える 失敗しても怒らない選手もいる 相手の長所を殺して味方の長所で戦う 長所で戦う 相手の長所を殺して長所で勝つ 選手の能力をどう生かすか考えて決まるのがシステム

このカテゴリーは「日本の教育者は怒れない」「個性はすごさである」「選手を見た上で長所を生かす」の 3 つのサブカテゴリーにより

構成されている。

指導者 C は、このカテゴリーに関してオフザピッチとオンザピッチの観点から考えている。オフザピッチの観点では「そう、生徒と能力とを考えてね。もちろん家庭的状況も考えてね。」と述べ、指導者は選手の能力や状況を見極めて指導に当たらなければいけないと指摘する。そしてオンザピッチの観点では「選手の能力をどう生かすのが考えて決まるのがシステム。というのが僕の考え。」と述べ、選手の能力、個性を生かすために戦い方を構築することが指導者には求められると指摘している。

「個性」のカテゴリーでは、指導者は選手の個性、特性を見極めて、その選手に合った指導をしなければならないことが示唆されている。

4. 指導者 D

18 ページにわたるインタビューデータから 114 の意味単位 (meaning unit) が得られた。これらの意味単位 (meaning unit) は「自分と向き合う」「楽しみながら自分を鍛える」「スポーツで自由と義務を学ぶ」「チームワークが大切」「タイミングを見逃さず伝える」「勝つことで選手が変わる」「セカンドキャリアを考える」「人間性と技術を並行して教える」「オフザピッチがオンザピッチにつながる」「人間性指導が大切」「強いチームの人間性はしっかりしている」「高校生への伝え方には工夫がある」「人間性と技術を併合して教える時期を見失わない」「今の今を大事にする選手を育てる」「指導者の情熱を選手に伝える」「技術を心と体が支える」の 16 のサブカテゴリーに分類された。これらは最終的に「自立」「他律」「個性」の 3 つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーの選手に対する影響度の強さは図

4の中に，カテゴリーの大きさで示した．以下，指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーの分析過程を詳術していく．

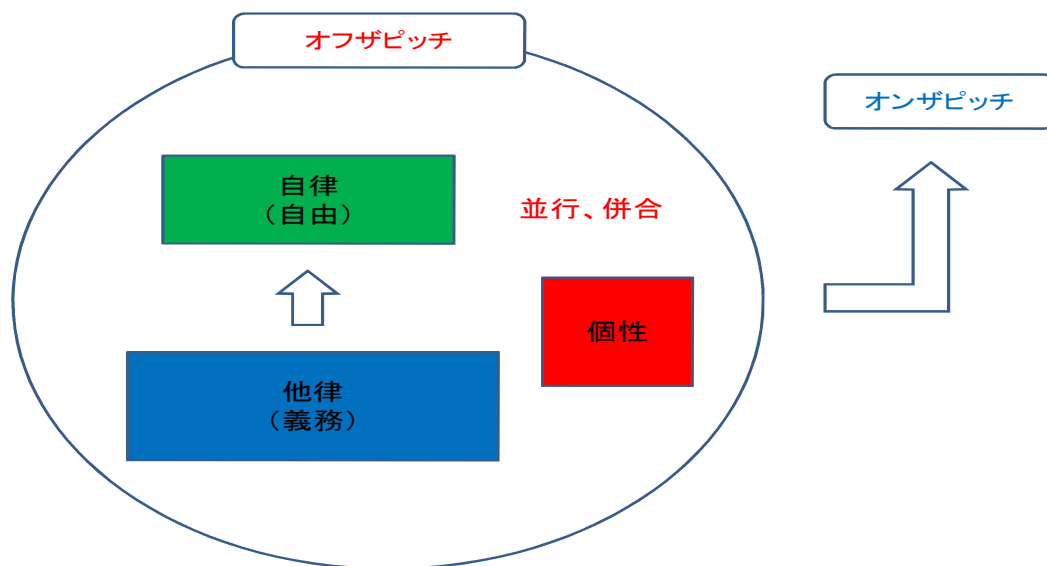


図 4 指導者 D の人間形成に関するメンタルモデル

1) 自律

表 5 - a 指導者 D 階層のカテゴリー一覧

自律	自分と向き合う	ミスは誰にでもある 苦しい事もたくさんある 苦しい時に愚痴、言い訳をしない 弱音を吐くのは弱い 勝負事は強気でなければいけない ミスに対して自分が悪いと思うべき
	楽しみながら自分を鍛える	楽しみながら自分を鍛える 楽しみながら自分を磨く
	スポーツで自由と義務を学ぶ	自由と義務を自然に学ぶ 守るべき所を守っていない世界が日本にはある 義務が消えて自由だけになっているのが今の日本 スポーツには1番自由と義務を学べる ペナルティーはスポーツにしかない スポーツを活用して大事なことに教える スポーツを通して選手が学んでいることを教える 自分の義務に対して責任感を持つ
	チームワークが大切	チームワークが大切になる チームワークを学ぶのがスポーツの良さ チームワークを学んだ人からチームワークが生まれる
	タイミングを見逃さず伝える	子供のやりきる時を見極める 伝える時期とタイミングを見失わない 時期を見ることは大切 選手を見続ける 見続けて伝えるべきタイミングを考える 時たま見ても分からない 見続けないとタイミングが分からない 今言わなきゃいけない時が絶対ある 全部タイミングがある 頭に来るとタイミングを失う 言うべきタイミングを絶対に忘れない 選手の頑張った時を見逃さない 言わなきゃいけない時は絶対ある
	勝つことで選手が変わる	選手に夢、目標を与える 2, 3回全国に行くが変わる 連続して勝つことで選手が変わる 2, 3回全国優勝して本物になる
	セカンドキャリアを考える	将来を考えて大学進学を勧める セカンドキャリアを考える
	人間性と技術を並行して教える	サッカーと人間性は並行にある 場に置くことで並行して覚える 人間性と技術を並行して教える 1つずつ高めるのが指導順序 人間性と技術を並行して育てる ユース年代で一番人間性と技術を並行しての指導が必要 人間性と技術を並行して育てるのがユース年代の特徴

このカテゴリーは「自分と向き合う」「楽しみながら自分を鍛える」

「スポーツで自由と義務を学ぶ」「チームワークが大切」「タイミングを見逃さず伝える」「勝つことで選手が変わる」「セカンドキャリアを考える」「人間性と技術を並行して教える」の 8 つのサブカテゴリーにより構成されている。

指導者 D は、このカテゴリーに関して「義務とか責任感、自分の守るべきことが守れてないと反省してくれたら良いんだけど。自分のことじゃなくて、すぐ相手のこととかそういうのに持っていくのは嫌だよね。」と述べている。ここではオフザピッチでもオンザピッチでも、自分の行動に対して責任を持つことの重要性を指摘している。自分の行動に責任を持つことと関連して、指導者 D は「指導者っていうのは選手のそういう姿っていうのを 1 人 1 人見続けていなければいけない。その上で今っていうタイミングがどっかであると思うんだよね。」と述べている。選手の行動を普段から見続けて指導に当たることで、選手に伝えるべきことを伝えるべきタイミングで選手に伝えることができ、選手が自ら気づくと考えている。

「自律」のカテゴリーでは自分の行動に責任を持つことができるようになるのが大切だと述べ、指導者の役割として選手を見続けて、そのことに気付かせなければいけないと示唆している。

2) 他律

表 5 - b 指導者 D 階層のカテゴリー一覧

他律	オフザピッチがオンザピッチにつながる	大事にしてるのはオフザピッチ オフザピッチの行動はオンザピッチに全て通じる オフザピッチの行動はオンザピッチに全て通じる オフザピッチの指導がオンザピッチに自然とつながる コミュニケーションもオフザピッチにたくさんある コミュニケーションの取り方はオンザピッチの問題につながる 考える習慣を付けるために考える オフザピッチとオンザピッチは全て関連する 心は1つだからオフザピッチとオンザピッチはつながっている オンザピッチの前にオフザピッチがある オフザピッチを直さないとオンザピッチが直らない 義務をオンでもオフでも果たせるチームが良いチーム オフザピッチでしっかりしてる選手は良い使われ方をする
	人間性指導が大切	心というのは人しかない 作業ってというのは1番大事 サボる心があるからサボる 人を育てるのに大事なことは4つある 人間性を上げない限り技術は生きてこない プレッシャーでミスをするのは心の問題 決め手は人間性の質の高さ サッカーは人間性が強調されるスポーツ 社会に通用する人間ってというのが1番
	強いチームの人間性はしっかりしている	良いチームは選手の人間性がしっかりしている 良いチームには良い日常の行動がある 良いチームと試合をすると人間性の良さを感じる 強いチームとやっこそ人間性の大切さが分かる 強い相手を求めることが自分なりの結論につながる 強い相手は人間性が違う
	高校生への伝え方には工夫がいる	目標を1人1人持つことが結果につながる 1つ1つ話して選手はやっと分かる 経験の中で体得するのが本当の理解 叱る、褒めるのバランスを取ることで選手が伸びる 良いプレーをして褒めるほうが難しい ミスして怒ることは簡単 高校生には言って聞かせる 言って聞かせることが大事 理由を出して話さなければいけない ゆっくり選手の話聞く 話をして本人に響けば良い まず不満を聞く 褒める時に間接話法を使う時もある 叱るときは直接言わなければならない 教育の中で伝統は効果的である
	人間性と技術を併合して教える時期を見失わない	ユース年代は人間性と技術を併合して育てる 人間性と技術を併合してやらなければいけない時 指導には人間性と技術を併合したものが多い 生きていく段階でユース年代は併合する時期 厳しく言う、併合する時期がある 併合する時期がいつか来る 併合するタイミングを見失わない 併合する時期を考える

このカテゴリーは「オフザピッチがオンザピッチにつながる」「人間性指導が大切」「強いチームの人間性はしっかりしている」「高校生への伝え方には工夫がいる」「人間性と技術を併合して教える時期を

見失わない」の 5 つのサブカテゴリーにより構成されている。

指導者 D は、このカテゴリーに関して「義務ができているチームというのは良いチーム。義務というのは約束事だから。約束事を 1 人 1 人がオンザピッチでもオフザピッチでもしっかりと守ってるんじゃないかなと。」と述べている。約束事を選手 1 人 1 人がしっかりと責任を持って守ることでチームに規律が生まれ、その規律がしっかりとしているチームが良いチームだと指摘している。そして、規律の理解と関連して「理解というのは頭で理解すると同時に、最終的にはやっぱり体験だよな。経験っていうのか。経験の中で体得していかないと本当の理解につながっていかないから。」と述べている。ここでは指導者が、選手に口頭で選手に伝え、選手に行動させていく中で本物の理解へと昇華していくと指摘している。

「他律」のカテゴリーでは、選手 1 人 1 人が責任を持って行動することが規律につながるとし、その為に指導者は選手に規律を本当の意味で理解させなければいけないと示唆している。

3) 個性

表 5 - c 指導者 D 階層的カテゴリー一覧

個性	今の今を大事にする選手を育てる	オンザピッチでは最後まで頑張るのが大切 今の今を大事にする選手を育てたい 今の今を大事にしなければ将来は語れない 今の今を大事にする
	指導者の情熱を選手に伝える	自分の気持ちを伝えない限り、周りに伝わらない 自分がいかに表現して、相手の思いを受け取るか 情熱を伝えることで指導者と選手の思いが重なる 自分の情熱を生徒に訴える 指導者はあきらめてはいけない 選手にこちらの気持ちを植え付ける 負けたくないという思いを伝えきらなければいけない 自分の魂を選手に打ち込む 指導者のモチベーションを選手 1 人 1 人に植え付ける 選手が理解すれば全部変わる 毎日の練習で鍛えこむのがサッカー
	技術を心と体が支える	心と体が技術を支える 心というのは絶対負けない気持ち 技術を心と体が支えている

このカテゴリーは「今の今を大事にする選手を育てる」「指導者の情熱を選手に伝える」「技術を心と体が支える」の 3 つのサブカテゴリーにより構成されている。

指導者 D は、このカテゴリーに関して「最後の 1 秒まで頑張りきる。そういう選手を育てたいと思っとるよね。それは社会にも通用するだろうしね。結局今を大事にすることにつながる。」と述べている。サッカーの試合で、選手が自分を表現する為には頑張りきることができなければいけないとしている。そして頑張りきることは、選手が個性を発揮する為にも重要になってくると指摘している。さらにそういった選手を育てるために指導者は「自分の魂を打ち込まないといかんわけだ。」と述べている。指導者 D は選手を頑張りきらせる為にも指導者が、情熱を持って指導に当たらなければいけないと指摘する。

「個性」のカテゴリーでは、指導者が情熱をもって指導することで、選手が頑張りきれようになり、個性を発揮することにつながると示唆している。

5. 指導者 E

19 ページにわたるインタビューデータから 122 の意味単位 (meaning unit) が得られた。これらの意味単位 (meaning unit) は「自分で考えさせる」「仲間の長所を引き出すために何が出来るのか」「きづくことが転機になる」「選手の市場価値を高める」「サッカーを通して人を育てる」「サッカーは教育より大きい」「オン、オフを区別して考えない」「選手の事を考えて指導する」「魅力のある人間を育てる」「日本人が世界で認められるようにする」「マニュアルは同じ人を育てる」の 11 のサブカテゴリーに分類された。これらは最終的

に「自律」「他律」「個性」の3つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーの選手に対する影響度の強さは図5の中に、カテゴリーの大ききさで示した。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーの分析過程を詳術していく。

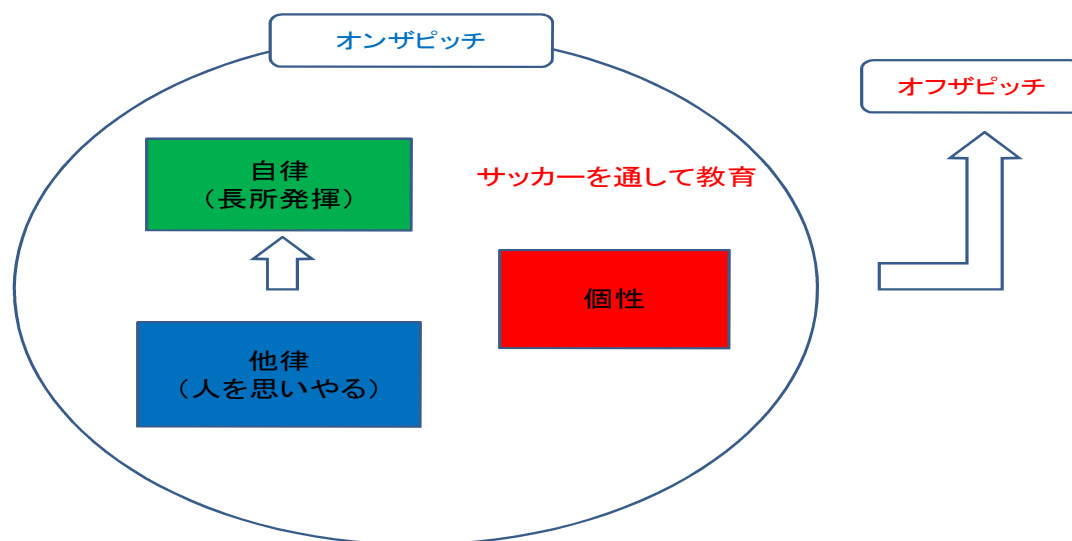


図5 指導者Eの人間形成に関するメンタルモデル

1) 自律

表 6 - a 指導者 E 階層のカテゴリー一覧

自律	自分で考えさせる	内容ではなく考え方 考え方を言う 感性で動く 観察して考える 自分が正しいと思ったことが正しい 正しいかどうかをトレーニングで考える 考えて行動させるのが自己責任 自分のミスは自己責任で取り返す 自分主導でやるから勝つ 自分で考えられるような選手を育てる 現場レベルで自分が何を判断するか 女将さんのようなサッカー選手を育てる 答えを教えない 自分で考えさせる、観察の繰り返し 答えを言うタイミングが問題 いつ答えを与えるかが大事 指導者もセンスを磨く 感じる事が大切 考え方を日々教えている
	仲間の長所を引き出すために何が出来るのか	次の人がやりやすいように 自分や仲間の良さを出すことをオンザピッチでやる 皆長所があって短所がある 理解した上で長所を引き出してあげる 自分の為でなくチームの為にプレーする チームの為に良くするという考え方 技術を磨いて何かをするわけではない 技術は手段の1つ 技術を使うと次の選手が楽になる 良い状態を作る繰り返し ボールを持つて人の為に自分が何かをする 仲間の為に何を選ぶか 自分を仲間に伝える 理解して尊重し、周りの人を心地よく生活させる 次の人の為に自分は何をしたのか 人の為に自分が上手くなる 周りは自分のために何かをしてくれる 得意なこと、苦手なことは人それぞれある 人は良い所も悪い所もある 人の為に自分が何が出来るかという考え方を持つ 自分の力をチームメイトの為に出す 人と人との信頼 信頼関係を作る上で嘘をつかない
	きづくことが転機になる	気付いた瞬間、ターニングポイントがある 厳しい試合に気付く瞬間がある 次の人の為にという発想から人が変わる 転機がある 自分達の甘さに気付くことは大きな転機

このカテゴリーは「自分で考えさせる」「仲間の長所を引き出すために何が出来るのか」「きづくことが転機になる」の3つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 E は、このカテゴリーに関して「俺はスーパーな選手っていうのは、考え方は教えるけども、自分で考えれるような選手を育てなアカンと思うねん。」と述べている。指導の中で大切にしているのは考え方を伝えるという点であり、考え方を伝えることで、選手が自ら考えて行動するようになると指摘する。そして、その考え方の基盤となるものとして「人の良い所や悪い所をちゃんと理解して尊重し、どういったことをしてあげれば、あるいはどういった声がけ、態度をしてあげれば、周りの人が心地よく生活していけるか」と述べている。考え方というのは自分本位なものではなく、如何に他人が心地よく生活できるかを判断するのが考え方であると示している。

「自律」のカテゴリーでは、他人の為に何ができるかを基盤とした考え方を指導者が伝えることで、選手が自ら考えて行動できるようになると示唆している。

2) 他律

表 6 - b 指導者 E 階層のカテゴリー一覧

他律	選手の市場価値を高める	具体的なことは教える 選手の市場価値を高める 選手1人1人の市場価値を高める 選手の市場価値を高める 単に頑張るより特徴を持つ 教育で教えていく 市場価値を教育で高める 価値を高めないと生きていく術にならない 市場価値を高めることが指導者の役割
	サッカーを通して人を育てる	サッカーを突き詰めれば人間教育はできる サッカーを突き詰める サッカーを通して何を教えるか サッカーと人間教育は分けて考えられない 選手の姿勢はサッカーに置き換えられることができる 優れたサッカーマン、優れた人間を目指すことはつながる サッカーで人を育てる 一流を目指した結果としての人間性 サッカーで人を育てる 一流を目指す結果としての変化 サッカーで教えていく サッカーで教えるしかない サッカーを一生懸命させる
	サッカーは教育より大きい	サッカーをすれば全員が大人になる訳じゃない サッカーと部活を切り離して考える サッカーは教育より大きい サッカーの方が教育よりでかい サッカーはそういう(教育だけの)スポーツじゃない サッカーは教育だけではない サッカーの魅力がまずある サッカーマンとしての努力をする サッカーは好きにやるもの クリエイティブな生き方をするように教える
	オン、オフを区別して考えない	オンザピッチもオフザピッチも同じ オンザピッチ、オフザピッチを区別して考えない 一流のサッカーマンになるにはオンでもオフでも超越する必要がある 人間教育もサッカーの1つであり人間力がないと1流にはなれない サッカーの中に教育が入っている サッカー、人間性の追及は一緒 一流を目指さないと人間性が高まらないという考えでもない 経験を皆で関わることで変わる 一生懸命やることで人間性が高まる 一生懸命努力することを通して変わる

このカテゴリーは「選手の市場価値を高める」「サッカーを通して人を育てる」「サッカーは教育より大きい」「オン、オフを区別して考

えない」の4つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 E は、このカテゴリーに関連して「基本的にオンザピッチにおいてもオフザピッチにおいても同じやと思ってんねん。」と述べている。オンザピッチ、オフザピッチを分けて考えるのではなく、サッカーを一生懸命プレイすることが人間形成につながると考えている。そして「高い志を持って一流を目指すことによって結果として大きく変化する」と述べ、高い志を選手が持って一流を目指すことで人間性も一流になると指摘する。さらにオフザピッチでも伝えなければ、選手が分からないことに関しては「でも挨拶とか荷物ちゃんと並べましょうとか、そういう具体的なことは教えていかへんとあかん。」と述べている。こういった具体的なことを選手に伝えることで選手の価値を高まっていくと指摘する。

「他律」のカテゴリーでは、選手が高い志を持って成長していく中で人間性も高まるとし、指導者はサッカーの中で規律を伝えていくべきであると示唆している。

3) 個性

表 6 - c 指導者 E 階層のカテゴリー一覧

個性	選手の事を考えて指導する	現場に即して言う プレーヤーズファーストがベースにある 環境や声かけを意識する 指導者が環境を整える ハード面だけでなくソフト面の環境を整える コーチングで力を与える 内的モチベーションを高める環境 言ったことは徹底して指導する
	魅力のある人間を育てる	守備に追われていても子供は伸びない 魅力のある人間を育てる 普通のことで魅力は生まれない 魅力ある人間を輩出するには 同じ練習では平均的な選手しか生まれない 人と同じことをしない 人と同じことをしないのはオフザピッチでも一緒 何かに集中して練習する選手を作る 意図的に突出した選手を作る 魅力のある選手になって欲しいというのがベース 魅力のある選手になる
	日本人が世界で認められるようにする	選手とコーチのスタイルは日本のスタイルだけじゃない サッカー界は甘い 世界で勝てない 世界で日本人が認められる 夢や志を高くすることが指導者の役割 夢や志を高くする 志を高く持ち、信じてやり抜く 志を高く持ってもらいたい 日本人が誇りを持つ為にサッカーが大切 誇りを持って生きていける日本人を育てる
	マニュアルは同じ人を育てる	マニュアルで同じ人が生まれる 今の高校サッカーは皆同じサッカーをする 指導者が真面目に教えるから同じサッカーになる

このカテゴリーは「選手の事を考えて指導する」「魅力のある人間を育てる」「日本人が世界で認められるようにする」「マニュアルは同じ人を育てる」の4つのサブカテゴリーにより構成される。

指導者 E は、このカテゴリーに関連して「選手の成長とか魅力のある選手になって欲しいっていうのはベースになってくるよね。」と述べている。魅力のある選手を育てる為には、チームとして高い志を持ってサッカーをしていく必要があると指摘している。さらに「突出してドリブルだけは必ず、1日1時間こいつは練習してるとかいう選手を育てとかへんかったら規格外な選手、魅力のある選手っていうのに

はなっていかなへん。」と述べ、魅力のある選手になる為には突出した武器を持たなければいけないと示している。そして「日本人が日本人として誇りをもって生きていくために、サッカーってすごく大切やねん。」と述べ、魅力のある選手が世界に認められることで、世界に日本人が認められるようになると指摘している。

「個性」のカテゴリーでは、高い志のあるサッカーをしていくことで魅力のある選手が育っていき、その選手が世界で認められることで日本人が誇りを持てるようになると示唆している。

6. 高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者の人間形成に関するメンタルモデル

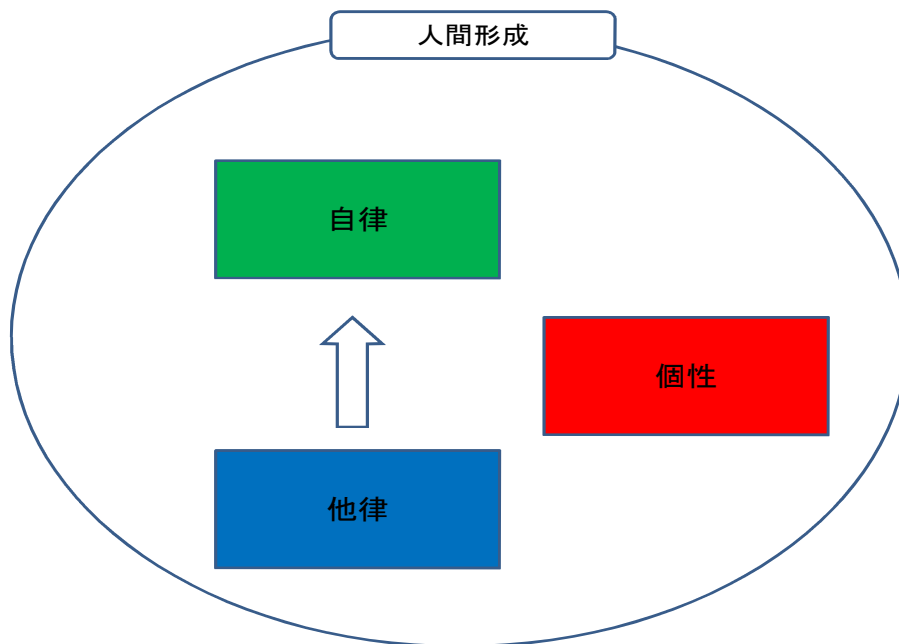


図 6 高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある
高校サッカー指導者の人間形成に関するメンタルモデル

対象者 5 人の分析結果から高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者の人間形成に関するメンタルモデルが構築された．このメンタルモデルは各指導者の分析結果から抽出された指導者が選手に規律を教える他律，選手が自ら考え行動する自律，選手個々の力が発揮される個性の 3 つの要素によって構成されており，要素間の関連は図 6 に示した．理論的な分析は考察の章で詳述する．

IV. 考察

ここから，結果によって得られた高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者の人間形成に関するメンタル・モデルについて理論的な考察を加える．

1. 他律から自律へ

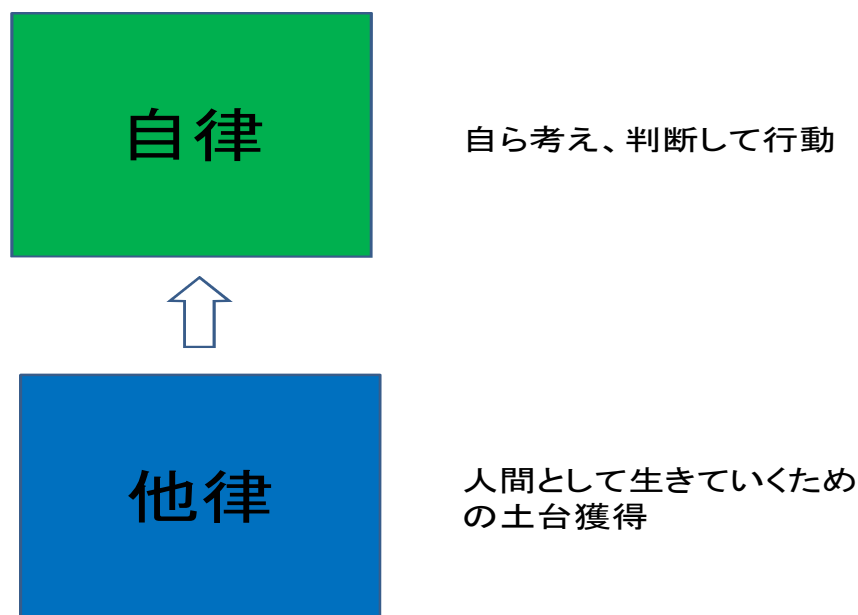


図 7 対象者となった指導者 5 名（A～E）のメンタルモデルにおける他律から自律への関係

本研究での対象者による人間形成の特徴として，選手に規律を教える他律から，選手が自ら考え行動する自律への指導順序が見受けられた．まず他律により教育することに関して指導者 B は，

「色々なことをしつけて，人のものをとっちゃいけないとか．ね，それを自由に自由になってやったらね，人のものをとったりしてそれが当たり前だと思っちゃうわけですよ．知らないのと知っててやるのは違

う．知っててやるのは悪いって言うよ．」

と述べている．指導者 B が述べるように他律から選手は，正しい判断の基準を身につけ，正しい行動をとることができるようになる．正しい行動をとらせるために，最初に他律により教育していると考えられる．こういった考え方は，指導者 B だけでなく他の指導者，例えば指導者 A も

「できるかどうかそういうのは人として大事な部分であり，自分の判断の中であいさつができるかできないかっていうのは，最終的にはオンザピッチの中でもオフザピッチの中でも，自分でベースにある部分を理解して判断して行動することにつながる．」

と述べている．このように，まず他律により指導することに関して，松田（2003）は

「アイデンティティを作るため，自分の考えを出して，いろいろと工夫していくのは，自分の体内に生きていくための土台をしっかりと固めてからだ．生きる基本をまず先達からゆっくり学び，しっかり継承し，それを自分自身用に加工していくのは，それこそ自分らしきで勝負できるようになる二十歳ぐらいからでよい．」

と述べている．松田（2003）が述べるように他律とは，人間として生きていくための土台づくりだと捉えることができる．指導者から選手に対して人として守らなければいけないこと，大切なことを伝えていくことで選手が生きていく上での基盤，考える基準を形作っているといえる．

次に，選手が自ら考え行動する自律に関して，指導者 C は「個性．創造力にもつながるね．あるいはアイディアかな．こんなものは自ら育つというか，自由な発想の中で育つ．これが自主性だね．」と述べている．人間としての基盤ができている選手に対して，自由な発想を持って行動することを許すことで，規律を持ちながら個性を発揮でき

るようになる．そして規律を守りながら個性を発揮することが，自主性に繋がっていくとしている．

個性を発揮する為に必要になるものに関して，指導者 A は「判断するのもその子になってくるし．だから最初に言ったように自分で色々な事を判断できるということを身につけておかないと駄目だね．」と述べている．他律により身につけた規律に縛られ，自らで決断することが，できなくなってしまうといけないとして，自律における判断の重要性もここで示されている．規律を守る中で個性を発揮する機会が与えられても，自分自身が判断して個性を発揮できなければ自主性とはいえないといえる．

この自律に関して黒田（2008）は

「選手を戦術でがんじがらめにするのはよくない．たとえ勝っても，選手は面白くないだろう．選手の自主性を重んじ，サッカーを楽しいと感じさせ，そのなかで技術も向上させてチーム力を高める．滝川第二時代に私が取った方法は，言葉にするとこうなる．ひとことで言えば，選手に自立的自由をあたえるということだ．」

と述べている．黒田（2008）が述べるように自律は言い換えれば，選手に「自立的自由」を与えるということになる．他律により規律が守れるようになった選手に対して「自立的自由」を与えることで，選手が自ら判断するようになる．自ら判断して行動することが選手の個性を発揮する機会になるのである．

上記のことから，本研究の対象者が他律から自律への指導順序をとる目的は，選手に人間として生きていくための土台を獲得させた上で，選手自身が個性を発揮していくようにすることにあると考察できる．

2. 他律と個性

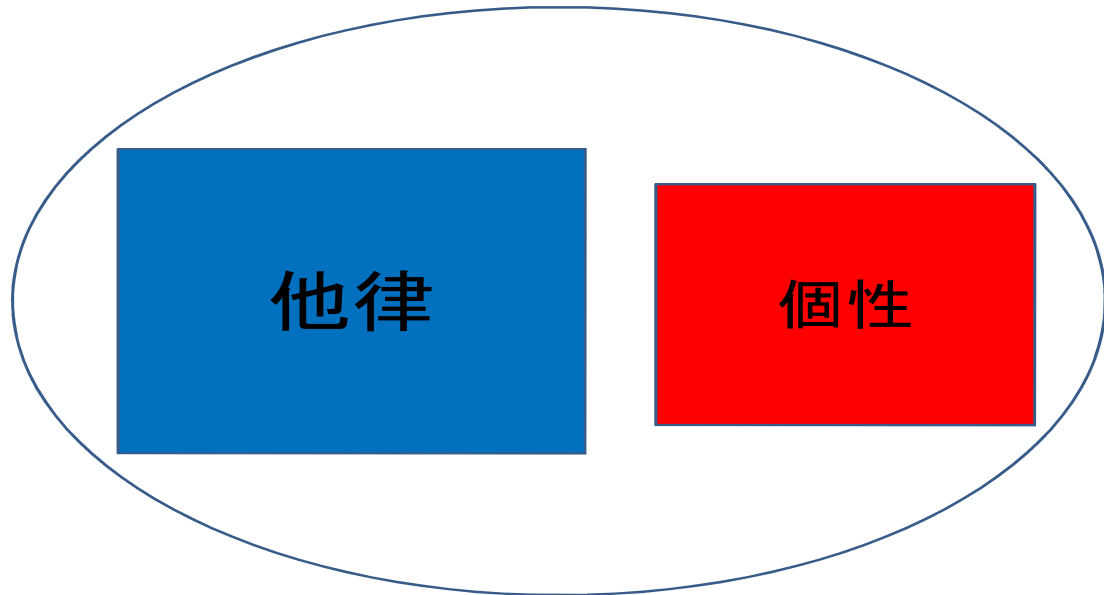


図 8 対象者となった指導者 5 名（A～E）の
メンタルモデルにおける他律と自律のバランス

本研究での対象者の人間形成におけるメンタルモデルでは，選手に規律を教える他律が大きく，選手が自ら考え行動する自律が小さいという傾向が見受けられた．

この傾向に関して倉石（2005）は，「よく高校などにあることだが，出てくるプレイヤーすべてが同じプレイをすることがある．相手にとっては，これほど楽なことはない．」と述べている．倉石（2005）が述べるように選手に対して，指導者側から働きかけすぎてしまうと，選手の個性を発揮させづらい環境になってしまうと考えられる．本研究の対象者においても，このことについて言及した箇所は何箇所も見受けられる．例えば指導者 E は，「今の高校サッカーみたって皆同じサッカーする．」と述べ，皆がサッカーを勉強して選手に教えすぎてしまうあまりに，同

じサッカーになってしまっていることについて言及している．さらに指導者 C も「やっぱり個性っていうのはすごさんやと思うんですよね．」と述べ、選手が発揮する個性を育てることの重要性について触れている．

しかし、メンタルモデルにおいては他律が大きく、自律が小さいという傾向が見受けられる．このようなメンタルモデルになる理由として、日本人としての特性が関与していると考えられる．オシム（2007）は、この特性について「日本人は、すべてが整備され自然に解決されていくことに慣れてしまっている．あるいは、何か新たな問題が起きると、国があるいは他の誰かがそれを解決してくれるものだと思いこんでいるのではないかとすら思う．」と述べている．全てを整備しさえすれば、自然に解決すると考える特性があるから、自然と他律が大きくなってしまっているのではないかといえる．指導者自身、個性を育てなければいけないとは理解しながらも、日本人の特性として自然と他律を意識してしまうのである．さらに田嶋（2007）は、日本人の他律による教育について「いまの学校教育は、基本的にひとつの正解を求めるようなシステムになっていて、質問が出されると、その問題に対する正解を探そうという態度になりがちです．」と述べている．ここでは他律による教育の中においても、個性を発揮させる前段階としての教育ではなく、個性発揮を阻害する教育となっている可能性が示唆されている．日本人の特性として他律が大きくなってしまっている傾向がある中で、個性発揮の下地に他律がないということが、ここから分かる．

上記のことから、メンタルモデルにおいて他律が大きく、自律が小さいという傾向が見受けられるのは、日本人としての特性が関わっている．そして、この他律は個性発揮の下地になっていないのではないかと考察できる．

3. オンザピッチとオフザピッチ

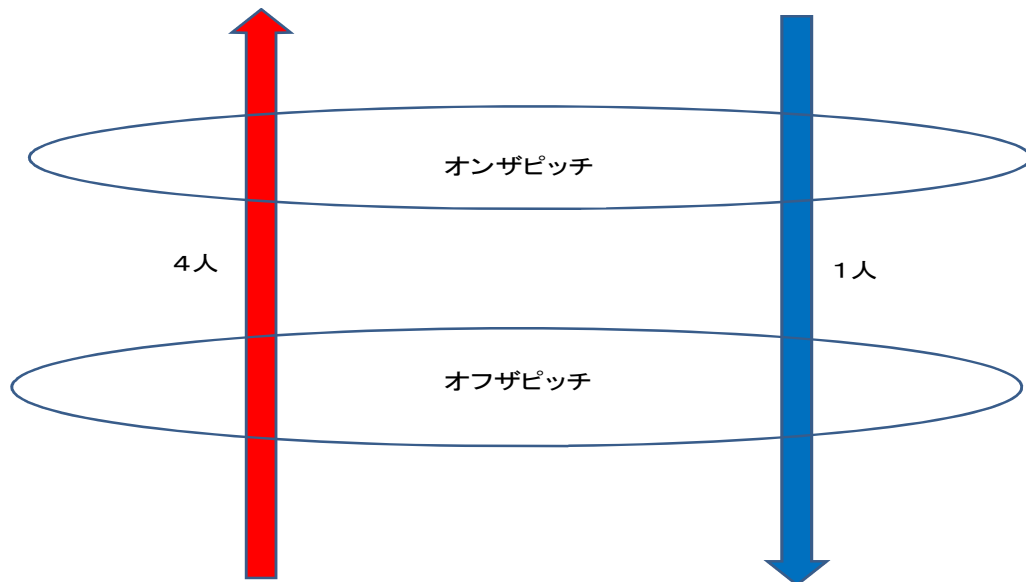


図 9 人間形成の捉え方

本研究の対象者において，人間形成をどう捉えるかという点で違いがみられた．オフザピッチでの指導がオンザピッチにつながっていくと考える指導者 4 名に対して，オンザピッチでの指導がオフザピッチにつながっていくと考える指導者 1 名に分けることができた．

前者は指導者 D が「心は 1 つだから．心は 1 つだし頭も 1 つだから．オフザピッチの中でそういうことを言うということは，オンザピッチの中でも言ってるよね．」と述べるように，指導する上で選手の心は 1 つなのだから，オフザピッチで人間性を指導することはオンザピッチの変化につながると考えている．

前者のこういった考え方に対して，後者である指導者 E は「サッカーを突き詰めていけば人間教育はできるわけやんか．」と述べている．指導者 E の考え方としてサッカーは教育よりも大きいものであると

というのが前提にあり、サッカーを突き詰めることが人間形成につながっていくと捉えている。

このように指導者間で考え方に差がでる 1 つの要因として、団塊世代と団塊ジュニア世代の観点から考察することができる。前者 4 名は団塊世代であるのに対し、後者 1 名は団塊ジュニア世代である。この団塊世代が受けてきた教育に関して大城（2005）は

「敗戦と GHQ による戦後維新は、明治以降の天皇主権中央集権体制の公的中心であった日本政府を温存させつつ、アメリカ型の個人主義民主化を押し付けた。そのような混乱期に初等教育を受けたのが団塊の世代である。戦後の日本は、公（階層性）と私（自分、個人）が中心となり、共（多様性）が軽視され無視されてきたといえる。」

と述べている。ここで注目して捉えてみたいのは、団塊世代が受けた教育は多様性を軽視したものであったという点である。物事や人に多様性があるという考えが軽視された教育を受けたことから、前者の指導者は、人間形成に対して 1 つの角度で捉えている可能性があると考えることができる。

それに対して後者の考え方をしている 1 名は、団塊ジュニア世代と呼ばれる世代に属している。この団塊ジュニア世代は団塊世代の子供に当たる世代として、団塊世代の教育の影響を受けている世代であり、大城（2005）が述べるような多様性についても色々な捉え方をしていると推察することができる。だからこそ団塊ジュニア世代である後者の人間形成の捉え方には、前者と違う特徴がみられたと考えることができる。

人間形成の捉え方についてオフザピッチでの指導がオンザピッチ

につながる考え方と、オンザピッチでの指導がオフザピッチにつながる考え方に分かれていた。本研究では人間形成の捉え方がこのように分かれる要因として、指導者自身が受けてきた教育が挙げられるのではないかと考える。

4. サッカーと人間形成の関係

本研究の対象者は、サッカーと人間形成がどのような関係にあるべきかという理解を、しっかりと自分の中で確立していた。以下に各指導者が考えるサッカーと人間形成の関係をまとめる。

指導者 A はサッカーと人間形成の関係について、「(人間形成について)今言ったことは全てサッカーをやるのに必要なことなんだよね。」と述べている。ここで述べているように指導者 A は、サッカーも人間形成も求められる要素は全て同じであると考えている。

指導者 B はサッカーと人間形成の関係について、

「伝えるじゃなくて、感性を磨く。感じることを、どうしてこういう嫌なことを感じるのかね。どうしてこんな楽しい事を感じるのか。全て感じ方があるわけですよ。それを大事にしたいが為に私たちの仕事があるのかなって思う。」

と述べている。ここで述べているように指導者 B は、選手自身がどのように感性を磨いていくのかが、サッカーにも人間形成にも共通して重要になることだと考えている。

指導者 C はサッカーと人間形成の関係について、「人間教育が僕は全てだと思うんですよ。オフザピッチ、オンザピッチといっても人間教育が基本だと思う。」と述べている。ここで述べているように指導者 C は、人間形成が基本になってサッカーが積み上がっていくのであ

ると考えている。

指導者 D はサッカーと人間形成の関係について、「最後の最後まで頑張りきるという気持ちを持つこと。2 つ目は愚痴言わない。3 番目は言い訳しない。4 番目は人をなじらない。そのことは非常に大事だと僕は思う。」と述べている。ここで述べているように指導者 D はサッカーにも人間形成にも共通して、上記の 4 つの点が重要になると考えている。

指導者 E はサッカーと人間形成の関係について、「サッカーが好きな子達にサッカーを通して何を教えるかやから。そこは分けて考えられへんと思うねん。」と述べている。ここで述べているように指導者 E はサッカーと人間形成は分けて考えず、サッカーを通して人間形成をしていくのが重要だと考えている。

横山ら（2005）は、このように指導者が、自らの指導における考えを確立させることについて

「自分の中にきちんとした規範があり、それにそった制度を持つことが教養の意味ということです。そして、こうした教養を身に付けるためには、多くの選択肢を出来る限り多く体験し、さらに時間をかけて練るということにあるとのことです。つまり自己形成ですね」

と述べている。横山らが述べるように、本研究の対象者は、自分自身の中でサッカーと人間形成の関係が、どういった関係にあるべきなのかを自己形成できているということが出来る。

サッカーと人間形成の関係に正解といえるものはない。しかし指導者自身が自分の中で、これだと思える哲学を作り上げていくことが重要なのではないかとここから示唆される。この自己形成によって、本研究の対象者は高校選手権優勝、日本代表選手輩出といった非常に優れた実績

を残すことができたのではないかと考える。

V. 結論

高校選手権優勝，日本代表選手育成経験がある高校サッカー指導者による人間形成に焦点を当てたメンタルモデルを作成することで，以下のことが明らかになった．

第 1 に本研究の対象者が，他律から自律へと指導順序を捉えていることが分かった．この指導順序の目的は，他律で選手に人間として生きていくための土台を獲得させた上で，自律によって選手自身が個性を発揮していくことにある．

第 2 にメンタルモデルにおいて他律が大きく、自律が小さいという傾向が見受けられるのは，日本人としての特性が関わっているからだと考えられる。

第 3 にオフザピッチの指導がオンザピッチにつながる考え方と，オンザピッチの指導がオフザピッチにつながる考え方に分かれるのは，指導者自身が受けてきた教育に起因する可能性がある．

第 4 に本研究の対象者が非常に優れた実績を残してきたのは，サッカーと人間形成の関係を自らの中でしっかり自己形成できていることと関係している．

本研究では，優れた成績を残した高校サッカー指導者人間形成について新たな考えを示すことができた．本研究が質的研究発展の一助になることを願う．

引用文献

- ・ Côté,J.,Salmela,J.,H.Baria,A.Russell,and S.J. (1993)Organizing and interpreting unstructured qualitative data.Sport Psychologist June7(2):127-137.
- ・ Côté,J.(1995)The Coaching Model: A Grounded Assessment of Expert Gymnastic Coaches' Knowledge.Journal of Sport & Exercise Psychology17(1):1-17.
- ・ Culver,D.M.,Gilbert,W.D.,Trudel,Pierre.(2003) A decade of qualitative research in sport psychology journals:1990-1999. Sport Psychologist (17).
- ・ 伊藤和之（2009）広島観音サッカー部は，なぜ強くなったのか．MJ新書：広島， p.46， p.84.
- ・ イビチャ・オシム（2007）日本人よ！．長束恭行訳．新潮社：東京， p38.
- ・ ジョンソン＝レアード， P. N.（1988）メンタルモデル：言語・推論・意味の認知科学．海保博之監修．産業図書：東京．
- ・ 北村勝朗・永山貴洋・齊藤茂（2005）優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？質的研究によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築．スポーツ心理学研究（32）：17 - 28.
- ・ 古沼貞雄（2006）古沼貞雄 情熱．元川悦子著．学習研究社：東京， p.50.
- ・ 倉石平（2005）バスケットボールのコーチを始めるために．日本文化出版：東京， p15.
- ・ 黒田和生（2008）トモニイコウ．アートヴィレッジ：東京， p.24， p.40.

- ・ 松田保（2003）一流選手を育てるとはどういうことか．株式会社二見書房：東京，p.77.
- ・ 能智正博（2005）動きながら識る，関わりながら考える．伊藤哲司ほか編．ナカニシヤ出版：京都，p120.
- ・ 布啓一郎（2008）サッカー監督の流儀．羽中田昌編．スキージャーナル株式会社：東京，p.32.
- ・ 大城保（2005）「公共」概念の再考による 21 世紀日本の再構築：「公・共・私」を明確に区分して再考．沖縄国際大学経済論集 1(1)：71-87.
- ・ 呉 宣児（2005）動きながら識る，関わりながら考える．伊藤哲司ほか編．ナカニシヤ出版：京都，pp.78 - 80.
- ・ 田嶋幸三（2007）「言語技術」が日本のサッカーを変える．光文社：東京，p15.
- ・ 友添秀則（2009）体育の人間形成論．大修館書店：東京，pp.50 - 53.
- ・ ウヴェ・フリック（2002）質的研究入門＜人間の科学＞のための方法論．春秋社：東京，p.9，p.119.
- ・ 山邊光宏（2000）人間形成の基礎理論 第二版．東信堂：東京，pp.9 - 10.
- ・ 横森巧（2008）サッカー監督の流儀．羽中田昌編．スキージャーナル株式会社：東京，pp.19 - 20.
- ・ 横山勝彦・望月慎之（2005）文化装置としてのスポーツー「区分」社会からの脱却ー．同志社保健体育（44）：1 - 27.

謝 辞

本論文を作成するにあたり，厳しくも優しいご指導を賜りました指導教員の堀野博幸先生に感謝致します．

本研究を進めるにあたり，多くの指導者の方々からご協力を頂きました．被験者として研究に参加して頂いた指導者の皆様方には，心より厚く御礼申し上げます．皆様のご協力があり，良い結果が得られました．ありがとうございました．

日常の指導，議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた東京実業高校サッカー部の先生方，生徒達へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます．

また研究を通じて活発な議論にお付き合い頂いた堀野研究室先輩の樋口さん，同期の加藤君に感謝します．

最後に，私をここまで育ててくれた両親に感謝致します．本当にありがとうございました．

2011 年 2 月 24 日

大森 雄一朗